

## (研究ノート)

## 『吉利支丹抄物』における天狗と悪魔

## はじめに——問題の所在

大塚 英二

『吉利支丹抄物』とは、一九二〇年大阪府三島郡清溪村大字千提寺（現茨木市）の旧キリシタン東家の天井裏の「開けずの櫃」から、のちに国の重要文化財として指定され学校教科書には必ず掲載されることになる「聖フランシスコ・ザビエル像」などとともに発見されたもので、著名な国語学者の新村出氏によって『吉利支丹抄物』（以下『抄物』と略す）と命名された小冊子である。<sup>1</sup>現在、本資料の現物は残されていないが、幸いなことにレプリカが作られ、教育研究機関等には相当数現存している。ただし、相当数と言いつても、現状ではレプリカであっても残されている数はかなり限定されている。ちなみに、管見の限り、愛知県内では本学（愛知県立大学）を含め3つの大学でしかレプリカの所蔵は確認できていない。

その書誌情報は以下のとおりである。すなわち、一七世紀前半の写本で、複製は大阪毎日新聞社により一九二八年作成。原本は東藤次郎（当時）所蔵になるが、東京帝国大学（現東京大学）へ貸し出し中に所在不明となった。粘葉装で、縦一五・〇cm×横九・五cm、墨付一三八枚、別紙洋装表紙、というものである。

『抄物』については、発見当初からキリシタン版研究としてはもちろんのこと、言語学・宗教学等の分野からも注

目され、極めて貴重なものとして評価されていたが、ラテン語が和語的に記述・挿入されるなど複雑な言語的内容を含んでいたため、その後あまり言及されることなく半世紀以上が過ぎてしまった。もちろん研究が全くなかったわけではなく、『抄物』の一部である「御みいさのおがみやう并に観念の事」について、翻刻のうえ詳しい解説が加えられた。ただし、これは純粹にテキスト解説に徹したもので、『抄物』の性格について議論をしたものではなかった。

そうした中で近年画期的成果が出された。それが大阪大学のポーランド人留学生ソブチェック・マウゴジャータ氏の一連の研究(同時に博士号請求論文)である。<sup>③</sup>氏の研究によれば、『抄物』が十六世紀スペイン人神学者ルイス・デ・グラナダの『ぎやどべかどる』をはじめとするいくつかの著作に基づき翻訳作成された説教素材であること、そしてかつて千提寺に存在したあるキリシタン集団を世話した「看坊」(一般に禅宗の寺院で留守居または後見をする僧のことを指す)によって説教代行として朗読されるための実用的なノートとして意図・作成されたことが明らかとなった。同氏は、『抄物』をテキストとしてよく読み込み、グラナダの著作との比較検討を十分に行っており、この結論は動かないと思われる。しかし、いまだ若干の疑問とともに残された課題もある。それは以下の通りである。

一つには、『抄物』の作成者に関することである。本書を所蔵していた東家が隠れキリシタンのお宅であり、先祖が名主層であったことから、同家の先祖自身が本書の作成にかかわり、宣教師の常住しない地域において「看坊」として、キリシタン集団の指導的立場から本書を説教代わりに読み聞かせていたのではないかと結論付けているのであるが、これはいまだ実証不足である。東家が旧名主クラスであったとしても、その学識水準として果たして本書を直接に作成することができたか疑問である。本書の中身と構造を検討して、もう少し作成者像を絞り込んでいけるのではないか、ということである。

二つには、マウゴジャータ氏が本書の作成過程、すなわち翻訳の過程において仏教とのかかわりをあまり重視していないことが問題である。従来から、キリスト教の布教には、仏教的世界観を踏まえそれを活用する方策が取られたことが指摘されていた(例えば、ザビエルをはじめとした宣教師が大日如来をキリスト教におけるゼウスと読み替え

て布教し、多くの誤解を招いたことはよく知られている）が、本書でもそうした側面は垣間見ることができる。一つの作成者の問題とも密接にかかわるが、キリスト教布教地域と本書成立のあり方について議論できる。

私は以上二点についてかつて考察し、次のような結論を得た。<sup>4</sup> すなわち、一つには、宣教師とともに布教用のテキストをポルトガル語の原文から訳をつけ、妥当な日本語を辞書なしで案出することは当時の日本の名主クラスでは不可能だということ。そして、訳出された言葉に「題目」「だいもく」や「たいもく」も含む」という表現が多くみられることから、この協力者は法華宗ないし日蓮宗（ほとんどがこちら）をよく学んでいたこと。東家自身は題目という表現を当時用いておらず、むしろ東家は『抄物』を上から持たされたことが推測されるので、『抄物』をもたらした人物は領主でクリシタン大名であった高山右近の可能性が高いということである。

もう一点であるが、この地域では妙見菩薩信仰が盛んであったということがある。妙見信仰こそキリスト教布教の条件として非常に大きな意味があった。妙見信仰は天空の星々における天帝理解につながるもので、天空で不動の星、北極星を神Ⅱ天帝とみる信仰である。天地創造・全能の神として『抄物』においてゼウスは無数に出てくる。しかし、本書の元ネタとなったスペイン国内で出版されたものでは、ゼウスによる天地創造に関わる記述は見られない。それは、西欧の宗教観においてまず世界を神が造ったことに疑問を持つ者がいなかったからである。それに対し、日本社会ではそうした世界観が一般化しておらず、ゼウスによる最初の行為をいかに説明するかが重要となる。そこで、ゼウスという存在を具体的に理解させるために、天帝Ⅱ天空の中心Ⅱ星の神とする北辰に対する概念が導入されたのである。北辰、すなわち北極星を天帝とみ、それを妙見菩薩とみる信仰が、能勢妙見山を中心に高槻・茨木地域を含む北摂地方でかなり浸透していたと見ることができる。そのことが、当該地方でキリスト教の布教が矛盾なく進められた理由である。『抄物』成立における仏教的背景として、この妙見菩薩信仰が挙げられる。また、『抄物』の全体的な構成についても三十三という数字にこだわるなど、仏教的世界観を強く意識したものとなっている。

以上の成果の上に立って、さらに『抄物』をテキストとして読み込み、宣教師が活躍し、あるいは否定された大航

海時代の日本における歴史的文化的状況について考察を深めたいと考える。そこで、『抄物』に現れる「天狗」<sup>てんぐ</sup>という表現・記述に注目しようと思う。なぜなら、天狗は日本と西洋とは、ある意味で共通する部分とそうでない部分を持つと考えたからである。それは『抄物』における悪魔の日本語への翻訳なのであるが、日本では両義性を持ったものが何故西洋における「悪魔」とされたのか考察することは、本書の成立過程を考察するだけでなく、比較文化論としても興味深いものになると思われる。

## 1 吉利支丹抄物における「天狗」の記述

まず、テキストとして「天狗」が記されている部分をすべて提示し、検討していく。四か所あるが、その内容を史料1から史料4として掲げ、必要なところに傍線を施し訳を付けていく。

### 史料1

皆<sup>(一々)</sup>い<sup>(一々)</sup>ち<sup>(一々)</sup>く<sup>(一々)</sup>に<sup>(一々)</sup>それ<sup>(一々)</sup>く<sup>(一々)</sup>にあ<sup>(當)</sup>たる<sup>(苦)</sup>く<sup>(苦)</sup>し<sup>(苦)</sup>みを<sup>(苦)</sup>請<sup>(苦)</sup>ケ<sup>(苦)</sup>ぎ<sup>(苦)</sup>ると<sup>(苦)</sup>云<sup>(苦)</sup>事<sup>(苦)</sup>ある<sup>(苦)</sup>べ<sup>(苦)</sup>から<sup>(苦)</sup>ず<sup>(苦)</sup>、其<sup>(苦)</sup>ゆ<sup>(苦)</sup>へ<sup>(苦)</sup>は<sup>(苦)</sup>科<sup>(苦)</sup>人<sup>(苦)</sup>た<sup>(苦)</sup>る<sup>(苦)</sup>とも<sup>(苦)</sup>が<sup>(苦)</sup>ら<sup>(苦)</sup>身<sup>(苦)</sup>に<sup>(苦)</sup>「  
もち<sup>(持)</sup>たる<sup>(諸々)</sup>も<sup>(諸々)</sup>ろ<sup>(諸々)</sup>く<sup>(諸々)</sup>の<sup>(諸々)</sup>せん<sup>(感)</sup>ち<sup>(覚)</sup>いと<sup>(感)</sup>す<sup>(覚)</sup>ふ<sup>(節々)</sup>し<sup>(末々)</sup>ふ<sup>(末々)</sup>し<sup>(末々)</sup>」す<sup>(末々)</sup>ゑ<sup>(末々)</sup>く<sup>(末々)</sup>二<sup>(二)</sup>て<sup>(二)</sup>〔記<sup>(記)</sup>号<sup>(号)</sup>文<sup>(文)</sup>字<sup>(字)</sup>〕に<sup>(記)</sup>ら<sup>(銀)</sup>う<sup>(銀)</sup>ぜ<sup>(銀)</sup>き<sup>(銀)</sup>な<sup>(銀)</sup>し<sup>(銀)</sup>奉<sup>(奉)</sup>り<sup>(奉)</sup>、ぜん<sup>(全)</sup>たい<sup>(全)</sup>」み<sup>(全)</sup>な<sup>(全)</sup>料<sup>(料)</sup>  
の<sup>(料)</sup>道<sup>(道)</sup>具<sup>(具)</sup>二<sup>(二)</sup>な<sup>(二)</sup>した<sup>(二)</sup>る<sup>(二)</sup>如<sup>(如)</sup>く<sup>(如)</sup>、い<sup>(一々)</sup>ち<sup>(一々)</sup>く<sup>(一々)</sup>に<sup>(一々)</sup>それ<sup>(一々)</sup>く<sup>(一々)</sup>の<sup>(一々)</sup>くる<sup>(苦)</sup>し<sup>(苦)</sup>みを<sup>(苦)</sup>以<sup>(以)</sup>テ<sup>(以)</sup>、其<sup>(返)</sup>へ<sup>(返)</sup>ん<sup>(返)</sup>ほ<sup>(返)</sup>う<sup>(返)</sup>を<sup>(返)</sup>う<sup>(返)</sup>く<sup>(返)</sup>へ<sup>(返)</sup>し<sup>(返)</sup>」との<sup>(返)</sup>御<sup>(返)</sup>定<sup>(返)</sup>め<sup>(返)</sup>也<sup>(返)</sup>、か<sup>(返)</sup>の<sup>(返)</sup>  
所<sup>(恐)</sup>二<sup>(恐)</sup>て<sup>(恐)</sup>れ<sup>(恐)</sup>ん<sup>(恐)</sup>ほ<sup>(恐)</sup>を<sup>(恐)</sup>ふ<sup>(恐)</sup>く<sup>(恐)</sup>み<sup>(恐)</sup>し<sup>(恐)</sup>」ま<sup>(眼)</sup>な<sup>(眼)</sup>こ<sup>(眼)</sup>は<sup>(眼)</sup>て<sup>(天)</sup>ん<sup>(天)</sup>ぐ<sup>(天)</sup>の<sup>(天)</sup>お<sup>(恐)</sup>そ<sup>(恐)</sup>ろ<sup>(恐)</sup>し<sup>(恐)</sup>き<sup>(恐)</sup>を<sup>(恐)</sup>見<sup>(恐)</sup>せ<sup>(恐)</sup>」ら<sup>(苦)</sup>れ<sup>(苦)</sup>て<sup>(苦)</sup>、く<sup>(苦)</sup>る<sup>(苦)</sup>し<sup>(苦)</sup>み<sup>(苦)</sup>て<sup>(苦)</sup>れ<sup>(苦)</sup>、つ<sup>(難)</sup>た<sup>(難)</sup>な<sup>(難)</sup>ぎ<sup>(難)</sup>ざ<sup>(難)</sup>う<sup>(難)</sup>た<sup>(難)</sup>ん<sup>(難)</sup>  
い<sup>(難)</sup>つ<sup>(難)</sup>」わ<sup>(難)</sup>り<sup>(難)</sup>を<sup>(難)</sup>聞<sup>(難)</sup>き<sup>(難)</sup>し<sup>(難)</sup>み<sup>(難)</sup>、に<sup>(耳)</sup>は<sup>(耳)</sup>い<sup>(耳)</sup>つ<sup>(耳)</sup>わ<sup>(耳)</sup>り<sup>(耳)</sup>」ふ<sup>(耳)</sup>き<sup>(耳)</sup>め<sup>(耳)</sup>り<sup>(耳)</sup>、ひ<sup>(耳)</sup>ほ<sup>(耳)</sup>う<sup>(耳)</sup>悪<sup>(耳)</sup>口<sup>(耳)</sup>を<sup>(耳)</sup>う<sup>(耳)</sup>つ<sup>(耳)</sup>つ<sup>(耳)</sup>し<sup>(耳)</sup>」う<sup>(耳)</sup>め<sup>(耳)</sup>き<sup>(耳)</sup>こ<sup>(耳)</sup>ゑ<sup>(耳)</sup>を<sup>(耳)</sup>き<sup>(耳)</sup>く<sup>(耳)</sup>べ<sup>(耳)</sup>し<sup>(耳)</sup>、ざ<sup>(憎)</sup>う<sup>(憎)</sup>し<sup>(憎)</sup>ん<sup>(憎)</sup>  
と<sup>(食)</sup>ん<sup>(食)</sup>」よ<sup>(食)</sup>く<sup>(食)</sup>を<sup>(食)</sup>す<sup>(食)</sup>、む<sup>(食)</sup>る<sup>(食)</sup>に<sup>(食)</sup>を<sup>(食)</sup>ひ<sup>(食)</sup>に<sup>(食)</sup>す<sup>(食)</sup>き<sup>(食)</sup>こ<sup>(食)</sup>の<sup>(食)</sup>み<sup>(食)</sup>」た<sup>(鼻)</sup>る<sup>(鼻)</sup>は<sup>(鼻)</sup>な<sup>(鼻)</sup>に<sup>(鼻)</sup>は<sup>(鼻)</sup>、あ<sup>(鼻)</sup>ら<sup>(鼻)</sup>ゆ<sup>(鼻)</sup>る<sup>(鼻)</sup>悪<sup>(鼻)</sup>氣<sup>(鼻)</sup>の<sup>(鼻)</sup>た<sup>(鼻)</sup>へ<sup>(鼻)</sup>」か<sup>(鼻)</sup>た<sup>(鼻)</sup>き<sup>(鼻)</sup>を<sup>(鼻)</sup>以<sup>(鼻)</sup>テ<sup>(鼻)</sup>く<sup>(鼻)</sup>る<sup>(鼻)</sup>し<sup>(鼻)</sup>め<sup>(鼻)</sup>ら<sup>(鼻)</sup>れ<sup>(鼻)</sup>、  
し<sup>(品)</sup>な<sup>(品)</sup>く<sup>(品)</sup>の<sup>(品)</sup>「珍<sup>(好)</sup>物<sup>(好)</sup>もの<sup>(好)</sup>の<sup>(好)</sup>こ<sup>(好)</sup>の<sup>(好)</sup>み<sup>(好)</sup>に<sup>(好)</sup>ひ<sup>(好)</sup>し<sup>(好)</sup>よ<sup>(好)</sup>く<sup>(好)</sup>を<sup>(好)</sup>す<sup>(好)</sup>き<sup>(好)</sup>」た<sup>(口)</sup>る<sup>(口)</sup>く<sup>(口)</sup>ち<sup>(口)</sup>に<sup>(口)</sup>は<sup>(口)</sup>、し<sup>(願)</sup>ん<sup>(願)</sup>め<sup>(願)</sup>の<sup>(願)</sup>き<sup>(願)</sup>つ<sup>(願)</sup>を<sup>(願)</sup>以<sup>(願)</sup>テ<sup>(願)</sup>せ<sup>(願)</sup>め<sup>(願)</sup>」ら<sup>(實)</sup>れ<sup>(實)</sup>、人<sup>(苦)</sup>を<sup>(苦)</sup>そ<sup>(苦)</sup>し<sup>(苦)</sup>り<sup>(苦)</sup>  
も<sup>(妄)</sup>う<sup>(妄)</sup>こ<sup>(妄)</sup>ざ<sup>(妄)</sup>う<sup>(妄)</sup>ご<sup>(妄)</sup>ん<sup>(妄)</sup>等<sup>(妄)</sup>を<sup>(妄)</sup>は<sup>(妄)</sup>」き<sup>(吐)</sup>け<sup>(吐)</sup>る<sup>(吐)</sup>ぜ<sup>(吐)</sup>つ<sup>(吐)</sup>つ<sup>(吐)</sup>う<sup>(吐)</sup>は<sup>(吐)</sup>と<sup>(毒)</sup>く<sup>(毒)</sup>み<sup>(毒)</sup>を<sup>(毒)</sup>以<sup>(毒)</sup>テ<sup>(毒)</sup>譴<sup>(毒)</sup>す<sup>(毒)</sup>」べ<sup>(苦)</sup>し<sup>(苦)</sup>（カ<sup>(苦)</sup>ギ<sup>(苦)</sup>括<sup>(苦)</sup>弧<sup>(苦)</sup>は<sup>(苦)</sup>資<sup>(苦)</sup>料<sup>(苦)</sup>中<sup>(苦)</sup>の<sup>(苦)</sup>改<sup>(苦)</sup>行<sup>(苦)</sup>を<sup>(苦)</sup>示<sup>(苦)</sup>す<sup>(苦)</sup>、ま<sup>(苦)</sup>た<sup>(苦)</sup>ル<sup>(苦)</sup>

ビのマル括弧内は読みもしくは必要と思われる注記を、ヤマ括弧内は外来語の意味を、記号文字は聖人を表している、以下同じ：筆者注）

罪を犯した者はみな相応の報いを受けることになっているが、傍線部の天狗にかかわるところを訳すと、次のようになる。すなわち、そこに恋慕の気持ちを含んでいた眼は天狗の恐怖を見せられて苦しみ照れ、つまらぬ悪口や偽りを聞いた耳には嘘を吹き込み、誹謗中傷を現実のものとし呻き声を聞くだろうということである。つまり、普通の感情を持ったやさしい人間を天狗の恐怖が苦しめ、悪の感情を抱かせるとしているのである。悪魔の訳だから、天狗は全面的な悪の権化としての恐怖を示している。

## 史料2

彼所にはたへがたき寒くも有り、<sup>(悪)</sup>きへかたき火ねつも有り、<sup>(消)</sup>死する事なき<sup>(熱)</sup>「<sup>(打)</sup>り、<sup>(天)</sup>たへがたき悪氣有り、<sup>(無念)</sup>くらき事<sup>(思)</sup>」□□<sup>(口)</sup>計にあるべし、<sup>(夜)</sup>せめてのちやうちやく<sup>(心)</sup>、<sup>(危)</sup>てんぐを見る事、<sup>(危)</sup>科のはつかしき、<sup>(無)</sup>むねんさ、<sup>(少)</sup>万のよき事におもひたゆるこゝろほそさ<sup>(比類)</sup>「ぜうまんしてあるへきと也、<sup>(難儀)</sup>されば此内二<sup>(悉)</sup>一ツわづかなるくけんをすこ<sup>(輕)</sup>しのほど<sup>(受)</sup>」くるさへひるひなきなんぎならんに、<sup>(難儀)</sup>同時二<sup>(集)</sup>ことくあつめ請ケ、<sup>(言業)</sup>其久しき一夜二<sup>(例)</sup>夜にあらず、<sup>(無量無住)</sup>百夜にもあらず、<sup>(受)</sup>むりやうむ<sup>(苦)</sup>じううくべき事何たる心ことばか及<sup>(苦)</sup>ぶべきや、<sup>(苦)</sup>かやうにとあるといへども、<sup>(苦)</sup>こ<sup>(苦)</sup>これらのくるしみハみな第一と云べきに<sup>(前)</sup>「あらず、<sup>(例)</sup>なをすぐれて大き成たとへも」<sup>(苦)</sup>なきくるしみもあり

ここでは、地獄のようなところでの天狗との遭遇の恐ろしさを語り次のように述べている。すなわち、耐えがたく悪い気分となり、真っ暗な中で暴力が行われ、天狗を見たこと自体の罪と恥ずかしさ、無念さ、全ての善なることへの思いが絶えてしまう心細さが充満しているとし、その苦しみがいかに大きいかを述べている。天狗が悪魔として人

間の良心を打ち消し、徹底した醜さを持つものとして語られており、天狗には良心の一かけらも存在しないことがうかがえる。

### 史料3

天地はし(給)まりて前、今後までの間ニ其ためしなき(例)御なぬき御くらう也、誰のためぞと云へば、(細)つたなくいや敷あまさへ悪きやくふ(例)たうにして、てんぐにひとしきわさを(枝)なすともからのため也、何の故ぞと云へハ、御多(依怙)このためにあらず、又我等(依怙)功力故にもあらず、只ひとへにくわう(偏)大むへんの大じ大ひの御内証御あわれ(憐)み故也

ここでは、当時の社会が無慈悲な世の中になっていることに関連して次のように述べている。すなわち、世界が始まる前からそれ以降、経験したことのない難儀と苦勞の時代となっているけれども、それがだれの為かと言えば、愚かで卑しい身分で、それに加えて悪逆無道の天狗と同じようなことを仕出かす連中のためである、としている。すなわち、天狗と同列の悪人が世界を無慈悲にしているということであり、そうした人々を悪に導く存在、悪魔としての天狗が語られているのである。

### 史料4

きみてんに(君)(天)「まします御時はいかならん、てん地を(天)御ことば一ニて作りたまひ、てんの(天)「」のあんじよ、せかいのはんみぬ(天)(使)(世界)(万民)いんへるの(地)(獄)てんぐまでもいまなかれとおぼしめさ(天)(向)(迄)れば、ちりはいの如なし給ふべき御主(對)(給)の、我等人間にたいしたまひて調(給)給ふ御くとくのために、御作のもの、前にかしこまりま(後)(生)す御へり(譯)くたariを見奉る時は、我等かこしやう(助)をたすかるへき身のをき所は(德)「何国ニてあるへきやとおとろ

きて、「今ヨリしては万民のしたか下<sup>(下)</sup>」もか、むへけれどと思ひとるへき<sup>(取)</sup>」あらずや

ここでは、君<sup>II</sup>天子がこの世界を統治している場合を想定して次のように述べている。すなわち、君が天にいる場合にはどうなるかと言え、天地を御言葉一つで御作りになられ、天の「」の天使、世界の万民、地獄の天狗さえも今は消えろと言われれば、塵や灰のようにされてしまふ、としているのである。絶対的なものとしての神があり、日本の場合それはそれにつながるものを「君」として理解し、それに対置して悪者として天狗を置いているのである。日本の天狗における正邪の両義性は完全に否定されている。

以上から、『抄物』での天狗は徹頭徹尾ヨーロッパ的な悪の存在<sup>II</sup>悪魔を訳したものと考えてよいだろう。そこには、当時の日本人にとっては分かりにくい点が含まれていたと思われる。それは、両義性の認識と言うことである。

天狗は日本社会では強い力の象徴であり、悪として凶暴性を発揮することもあれば、時として弱者を救済する正義を振るうこともあったからである。天狗は不気味で怖いというイメージはあるが、それだけでなく、民衆にとって頼りつきたくなるような存在でもあったのである。なぜこうした天狗がデーモン<sup>II</sup>悪魔（ポルトガル語の音としては「ぢゃぼ」）の訳として出されることになったのか。そして、一方で天狗を必ずしも全くの悪魔としては訳さない例もあるのだ、その違いは何に由来するのかなど、節を改めて考えたい。

## 2 日本における天狗の理解

概説的理解を示すと、天狗という概念は中国から入ったもので、もともとは凶事を知らせる流星のことだったと言われている。しかし、こうした見方は日本ではその後展開せず、古い文献にはほとんど天狗の記載はなくなる。ところが、平安時代（一〇世紀頃）になると、突然妖怪として登場してくる。ただ、あくまでも怪異的なものであり、悪

魔と言えるものではなく、特異な能力を持った怪獣的な存在とみてよいであろう。

その後、日本の中世（一五世紀くらいまで）における天狗は、人と言うよりは、獣の顔を有し翼を持ったいわゆる烏天狗をそのイメージの代表としていた。この烏天狗が、その姿形からキリスト教国の悪魔になぞらえるようになったと考えられる。サタンやデビルは翼を持って獣（人間以外）の顔をしている。まさに烏天狗そのものであろう。

しかし、室町後期から戦国時代を経て近世初期には、天狗と言えば修験者の格好をし、赤ら顔で目が大きく鼻が異常に長い、いわゆる大天狗が天狗の代表的な姿になって理解されるように至る。これが現代にもつながる天狗のイメージであろう。彼らはその魔力を自身に手にした団扇によって発揮することになる。烏天狗が悪戯をして災いをもたらすだけの存在であったのに対し、大天狗はその魔力に神のイメージが重ねられることとなる。愛宕山の太郎坊や秋葉山の三尺坊などが代表的なものである。<sup>5)</sup>

天狗は、近世以降の日本でいえば鬼と同じように両義的な存在である。鬼は一般的には悪者であるが、時に周囲者のために重要な仕事をする。善良な弱者を保護する力を発揮することがあるのである。天狗も同様で、特に烏天狗までの動物的・怪獣的イメージから脱皮した大天狗のイメージは、その両義性の中でも超越した神的力量を民衆から委任されるような頼もしい存在ともなっている。

ここで、ハビアン（本名不詳）という日本人のイルマン（イエズス会の修道士）として徹底した仏教批判を行っていたものの、後にキリスト教を棄教して江戸幕府の禁教政策に協力し、「破提宇子」（ゼウスを破るの意）を書いた人物が、彼の著作の中で悪魔と天狗をどのように解していたか検討する。

ハビアンは当初「妙貞問答」というキリスト教布教のための著作を出す、その中で悪魔について触れ、更に天狗について次のように述べている。

時として、あの神とか、この仏とかに神変不可思議なことがあったなどということは、この天狗が天上で高慢の野心をとげようと思っただけでも、できなかったもので、せめては下界で人間にでも敬われないと思ひ、木仏、石



仏、宮、社のうちにへこもり、それらに託して怪異な姿を現すと、人は愚かなものなのです、このような理由を知らず、本当に神や仏がなしたのかと思つて、これを仰ぎ、とうとぶことなのです。愛宕の地蔵などというのは、みなみな天狗の真只中にあるものなのですよ。<sup>⑦</sup>

ここで示されているのは、天狗がもともとは天上にあつた者であるが、高慢がもとで神になりきれず下界に下りてきて、人間をだまし神のような振る舞いをしていているということである。

また、ハビアンは「破提宇子」では次のように述べている。

(ゼウス) はルシヘルを初めとし、彼に同意した三分の一のアンジョを下界に追い下し、インヘルノに墮さしめられた。これはすなわちアンジョが高慢の罪によつてヂャボ(悪魔)といつて、天狗となったものである。<sup>⑧</sup>

つまり、全能の神ゼウスはルシヘルというアンジョ(天使)とそれに従つた三分の一の天使を墮天使として下界に追放し、悪魔にしたのであり、それが天狗なのだというわけである。ここでは天狗は悪魔として理解されているが、一義的悪魔とはやや区別される存在であり、神と悪魔は紙一重というように理解されており、広い意味での両義性を見ることができよう。

ハビアンはもともと禅宗の僧侶であつたが、その母に導かれ洗礼した。彼のように日本で生まれ日本の社会に精通していた者であれば、当時すでに天狗は単純な悪的な存在ではなく、大きな神力をも併せ持つものとして認識されていたであろう。天狗の両義性を認識する環境にあつたハビアンであれば、キリスト教の悪魔の範疇には入れるものの、天狗は墮天使でなければならなかつたのである。

### 3 天狗の記載から見た『吉利支丹抄物』作成者の実態

ここでは、悪魔を天狗と翻訳し、なおかつ一義的な悪としてのみ解している点から、『抄物』の作成者像について

考える。1で見たように、『抄物』では悪魔としての天狗に神に迫るような霊的な力の大きさを認める記述は全くなく、全否定であり、中世までの悪い妖怪としてのみ理解されているようである。また、人間の中にある悪意をただ象徴するものとして理解されているようである。これはどのような意味を有するのであるうか。

悪魔から天狗への翻訳は、日本社会での天狗を十分に理解していない外国人宣教師だけの翻訳であつたのだろうか。『抄物』全体で見えていくと、日本人協力者がいたことは自明であり、その日本人があえて悪魔を天狗でよしとした意味を考える必要がある。

十六世紀には大天狗のイメージが出来つつあつたが、あえて古い烏天狗概念で対応し、絶対神（善）と絶対悪を対置しようとする意識を持った人物が『抄物』作成の協力者であつたと考える。それが結局宣教師と同じ目線で天狗を見ることにつながつたと推定する。それは近世期への過渡期にあつて、中世的な古い時代のイメージも併せ持つている世代の人物とすることができであろう。

また、ここには地域性の問題が絡んでくる。大天狗は修験者の格好をしているが、妙見信仰は役小角えんのかげの起こした修験道と密接にかかわっている。能勢妙見に隣接した地域として、北摂地域はまさに修験者としての大天狗を想起する地域なのである。その認識は近世期に定着すると思われるから、この地域で『抄物』が作成されたとするなら、悪魔と天狗を等置するとはあまり考えられない。つまり、大天狗＝修験者イメージが完全に出来上がる前の世代が作成に関わっていたとみるべきであろう。それは、おそらくハビアンよりも古い世代であると推測する。

## おわりに

以上、小稿では『吉利支丹抄物』という宣教師の布教用ノートにおける天狗の記述から、悪魔がどのように天狗と翻訳されたかを見、そうした翻訳のあり方から『抄物』作成者の実態に迫った。結論を述べるなら、『抄物』は次の

ような日本人信者の協力を得て作られたと考える。すなわち、キリスト教徒として絶対的神の世界に踏み込みつつ、日本社会において両義性を持たされつつあった天狗を、より古い天狗概念のもと一面的に悪として解釈しようとした日本人であるということである。彼は日本近世で活躍する人物というよりは、それ以前の世代に属した人物と見てよいであろう。

先に高山右近が日本側の協力者であった可能性が高いと結論付けたが、右近はハビアンより一回り以上（一三歳）年長で、その信仰心は極めて強固であった。右近が高槻城主として統治していたのは一五七〇年代半ばから八五年までであり、その期間に『抄物』が作成されたとすれば、いまだ近世的天狗理解の定着は不十分だったろう。ということで、右近が作成の協力者だった可能性はますます高まったといえる。

ちなみに、ハビアンが先の二つの文献を書上げたのは、それぞれ一六〇五年、一六二〇年とされており、右近が関わったと仮定した場合、『抄物』の成立年代とは三〇から四〇年以上の隔りがある。これこそが微妙な天狗理解の差異を生んだものと理解したい。

なお、比較文化論としては、今回取り上げたのは「天狗」だけであったが、『抄物』におけるそれ以外の表現素材からも、更に新しい分析ができると考える。今後ともそうした点に留意しながら検討していきたい。

## 注

- (1) 新村出「撰津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』七、一九二六年、現在は京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅において閲覧可) 中の「四、切支丹抄物」の節を参照のこと。
- (2) 尾原悟編『キリシタン研究第四二輯 きりしたんのおらしょ』(教文館、二〇〇五) を参照。
- (3) ソブジェク・マウゴジャータ「東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』の成立について」(『国語国文』八一―六、臨川書店、二〇一一) 及び「東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』と Guia de pecadores との関係について」(『日本研究』四八、国際日本文化

センター、二〇一三)を参照。

- (4) 大塚『吉利支丹抄物』と大航海時代の日本」(上川通夫・川畑博昭編『日出づる国と日沈まぬ国』(勉誠出版、二〇一六、所収)参照。

- (5) 以上の天狗の概説的なことについては知切光蔵『天狗の研究』(原書房、二〇〇四)を参照。また、天狗の烏天狗から大天狗への形態上の変遷については勝俣隆「天狗の古典文学における図像上の変化に関する一考察——烏天狗から鼻高天狗へ」(『長崎大学教育学部紀要、人文科学』七一、二〇〇五)を参照。

- (6) ハビアンについては釈徹宗『不干斎ハビアン——神も仏も棄てた宗教者』(新潮選書、二〇〇九)を参照。「破提字子」については、海老沢有道訳『東洋文庫14・南蛮寺興廃記・邪教大意・妙貞問答・破提字子』(平凡社、一九六四)を参照。

- (7) 前掲『東洋文庫14・南蛮寺興廃記・邪教大意・妙貞問答・破提字子』の「妙貞問答」の部分参照。

- (8) 前掲『東洋文庫14・南蛮寺興廃記・邪教大意・妙貞問答・破提字子』の「破提字子」の部分参照。

- (9) 前掲拙稿参照。

- (10) この書物の成立年代については前掲『東洋文庫14・南蛮寺興廃記・邪教大意・妙貞問答・破提字子』の解説を参照。